

Ⅲ 花 き

凡 例

は	種	○	
さ	し 木	□	
移	植	△	
定	植	◎	
摘	芽	×	
摘	蕾	⊗	
摘	心	⊠	
収	穫	▭	
電 照(消灯)		☼	(☼)
シェード(終)		■	(■)
トンネル(終)		Ω	(Ω)
ハウス(終)		⌣	(⌣)
マルチ(終)		✂	(✂)
二重被覆(終)		Ω	(Ω)
暖 房(終)		☰	(☰)
ネット張り		井	
堀 上 げ		✂	
山 上 げ(終)		⌄	(⌄)
せ ん 定		✂	
防 寒(終)		⌄	(⌄)
寒 冷 紗(終)		◆	(◆)
冷 蔵(終)		◇	(◇)
植物成長剤処理		↓↓	
施 肥		●	

花きの特性と環境保全型施肥技術

(1) 施肥に対する考え方

切り花はその種類が極めて多く、バラやカーネーション、カスミソウなどのように施設で栽培されている花きと、キクやマーガレットのように施設と露地で栽培されている花きに分けられる。

一方、鉢ものはほとんど施設で、限定された容器内で栽培され、土壌を主体とする培養土のほかに、様々な有機物やバーミキュライトなどの無機物が使用されている。ここでは施肥成分として重要な窒素、リン酸、カリの三要素と土壌pH及び基本的な肥培管理技術について述べる。

ア 窒素：最も生育に影響を及ぼす成分である。しかし、花の種類により適量域はかなり異なる。

イ リン酸：窒素に次いで生育、開花に与える影響が大きく、土壌の養分含量に応じた過不足のない施肥が必要である。土壌中のリン酸含量は施設、露地栽培いずれでも過剰傾向であることから、施肥量には注意する必要がある。

ウ カリ：吸収量の最も多い要素であるが、生育、開花への影響は窒素、リン酸ほど大きくない。

エ pH：花きは種類によって生育最適pHが異なる。pH5.0以下を好むツツジ、アザレアなどから、pH7.0程度を好むキンセンカ、ガーベラなどがある。しかし、多くの種類はpH6.0～6.5が適している。

オ 肥培管理の要点：花きの施肥は根の生育に好適な、土壌の物理性、化学性を維持しつつ、必要とする養分を適期に適量施用する。そのためには、十分に解明されない面はあるが、花きの栄養生理、養分吸収、肥料の利用率、土壌条件などを考えて、施肥管理する必要がある。

生産現場においては生育の不良、花の障害、養分欠乏症などが発生している。これは、過剰施肥及び成分のアンバランスに起因している。

従って、土壌診断の実施、土壌改良資材の投入ならびに養分吸収パターンに合った適正な施肥に心がける必要がある。

特に、環境保全型農業のために養分吸収パターンに合った緩効性肥料により、施肥量の削減を図るとともに、除塩処理を行わなくてよいような施肥管理をしなければならない。

(2) 養分吸収の特徴

ア 養分吸収量

切花、鉢ものの養分吸収量は表1、2のように種類によって異なる。

切花の10a当たり平均吸収量(kg)は、N 21.3、 P_2O_5 7.4、 K_2O 30.0、CaO 13.5、MgO 5.9である。

鉢ものの株当たり平均吸収量(g)はN 0.49、 P_2O_5 0.15、 K_2O 0.61、CaO 0.42、MgO 0.13である。

表1 切花の養分吸収量

作目	養分吸収量 (kg/a)					N(100)に対する吸収比			
	N	P ₂ O ₅	K ₂ O	CaO	MgO	P ₂ O ₅	K ₂ O	CaO	MgO
キ ク	1.51	0.37	2.61	0.64	0.24	25	173	42	16
バ ラ	2.72	0.29	1.58	1.03	0.51	11	58	38	19
カーネーション	2.59	1.57	5.69	1.87	0.72	61	220	72	28
ガーベラ	2.80	0.76	3.33	3.00	1.29	27	119	107	46
ユ リ	1.52	0.57	3.79	1.16	0.37	38	249	76	24
フリーズア ₁₎	4.66	1.17	7.52	1.51	0.89	25	161	32	19
スターチス	2.08	1.18	2.49	0.51	0.66	57	120	25	32
スイートピー	1.67	0.45	1.28	1.21	0.34	27	77	73	20
平均 ₂₎	2.13	0.74	3.00	1.35	0.59	35	145	62	26

(注) 1) g/36×60cm箱51球、2)吸収量についてはフリーズアを除いた。

花卉の栄養生理と施肥(農文協)より抜粋

表2 鉢花の養分吸収量

作目	養分吸収量 (Kg/株)					N(100)に対する吸収比			
	N	P ₂ O ₅	K ₂ O	CaO	MgO	P ₂ O ₅	K ₂ O	CaO	MgO
ガーベラ	0.82	0.17	0.89	0.24	0.11	21	109	29	13
グロキシニア	0.24	0.07	0.51	0.26	0.05	29	213	108	21
サルビア	0.51	0.08	0.52	0.13	0.06	16	102	25	12
シクラメン	0.62	0.20	1.23	0.72	0.36	32	198	116	58
シネリア	0.50	0.18	0.71	0.33	0.08	36	142	66	16
シンビジウム	1.20	0.35	1.05	1.99	0.37	29	88	166	31
ゼラニウム	0.29	0.21	0.19	0.15	0.13	72	66	52	45
パンジー	0.41	0.20	0.72	0.18	0.10	49	176	44	24
ベゴニア	0.11	0.03	0.19	0.06	0.04	27	173	55	36
ペチュニア	0.42	0.05	0.64	0.11	0.08	12	152	26	19
ペラルゴニウム	0.36	0.22	0.52	0.87	0.15	61	144	242	42
ポインセチア	0.59	0.13	0.41	0.31	0.09	22	69	53	15
ポットマム	0.35	0.07	0.39	0.11	0.03	20	111	31	9
平均	0.49	0.15	0.61	0.42	0.13	33	134	78	26

花卉の栄養生理と施肥(農文協)より抜粋

養分吸収量は、切花のバラ、カーネーションのように切花時の植物体重が大きく、切花期間が長く、切花本数の多い種類では多い。鉢もののシンビジウムなどのように植物体大きい種類では吸収量は多く、グロキシニア、ベゴニアなどのように植物体小さい種類では少ない。

一方、窒素に対する養分吸収比は切花、鉢花のいずれもカリが最も多く、ついでカルシウム、リン酸、マグネシウムの順となっている。

イ 養分吸収パターン

環境に養分を溶脱さないためには、養分吸収特性を明らかにして、吸収パターンにあった施肥を行うことが必要である。

愛知農総試の加藤は切り花を4つのタイプ (I (連続採花型)、II (二山型)、III (一山型)、IV (尻上がり型)) に分類し、それぞれのパターンに合った

施肥を提唱している。

また、元埼玉園試の細谷は鉢物について、長期開花型、発育相転換型、花芽分化後休眠型、栄養生長型、蓄積養分利用型の5型に分類している。

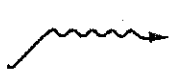



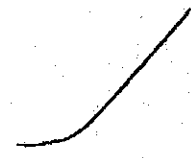

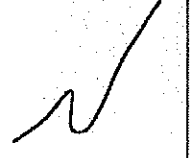

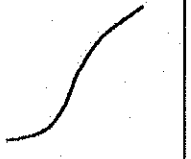





タイプ	I 連続採花型	II 複数採花サイクル型 (二山型など)	III 短期山型	IV 尻上がり型
花きの種類	バラ(ダラ切り) ガーベラ スイートピー	バラ(一斉切り) キク(二度切り) キク(三度切り) カーネーション	夏秋ギク、秋ギク ストック アスター スプレーギク キンギョソウ	カスミソウ トルコギキョウ スターチス 夏ギク
養分吸収パターン	 (連続吸収)	 (二山型吸収)	 (一山型吸収)	 (中～後期吸収)

図1 切花花きの養分吸収パターン(加藤、1993)

タイプ	長期開花 (シクラメンなど)	発育相転換 (ポインセチアなど)	花芽分化後休眠 (ハイドランジアなど)	栄養生長 (観葉植物など)	蓄積養分利用 (シヤコバサボテンなど)
生育量					
養分吸収 (窒素供給濃度)	 連続吸収	 連続吸収 (開花後やや減)	 花芽分化後中断	 連続吸収	 花芽形成時 中断(低濃度)

年月 ⇒ (いずれのタイプも生育初期は低濃度供給とする。)

図2 鉢物の生育相及び窒素吸収からみた分類(細谷、1993)

(3) 環境保全型施肥技術

ア 土壌診断に基づく元肥施肥

最近リン酸やカリが集積した土壌が多くなっている。これらの土壌では施肥前に土壌診断を行い、著しく富化されている場合は基準量より減らすか、無施用とする。

イ 汁液診断による施肥

水稻や果樹では、昔からカラーチャートを使った葉色診断や葉分析により施肥

時期、施肥量を決定する手法があった。花きにおいても、収量や品質を向上させるために、葉柄の汁液を迅速、簡易に分析することによって、施肥時期や施肥量を決定しようとする方法が栃木農試などで開発され、普及している。この方法は、必要な時期に必要な量施肥する点から環境保全型の施肥法といえる。

主要な方法と診断基準値を表3に示したが、サンプリング位置や品種、生育ステージ、季節により数値は変わるので、実施には注意が必要である。

表3 汁液診断の基準値 (ppm)

品 目	生育ステージ	サンプリング部位	NO ₃ -N、 K	基準値作成機関	
バラ ローテローゼ	秋～冬	採花枝の下から 3～4枚目の5 枚葉の葉柄	200	4,500	千葉暖地園試
	春～夏		120		
カーネーション ノラ タンガ	秋 (9～12月)	未着蕾枝の下位 葉の葉柄	400	4,000	滋賀農試
			500		
スプレーギク (夏秋タイプ)	茎長 25cm	展開葉から上部 の茎	200	1,700	栃木農試

ウ かん水同時施肥栽培(養液土耕)

かん水同時施肥栽培 (drip fertigation) は、養液を点滴かん水することにより、必要な養分と水を必要な時に与えるシステムである。必要最小限の養水分を供給するだけなので根域が制限され、溶脱する養水分も少なくなり環境保全型施肥法である。

養液土耕の特徴として、養液栽培より導入コストが安い、かん水・施肥が省力化・節減できる、塩類集積が起りにくいことが上げられ、カーネーション、キク、バラ、ガーベラ、ユリ等を中心に導入が進んでいる。

また、かん水同時施肥栽培により効率的に施肥するためにはリアルタイム診断(土壌溶液診断や汁液診断)を実施することが必要である。

エ 閉鎖型養液栽培

バラではロックウール栽培が普及し、静岡県では全体の5割程度にまでなっている。養水分の環境への負荷を軽減するためには、養液を循環する閉鎖型に転換する必要がある。装置としては販売されているが、設備費が高いなどの問題の他に、掛け流し方式に比べると、培養液のバランスが崩れやすい、特定成分が集積する、土壌伝染性病害の発生等の課題があり、栽培管理、養液管理技術が難しい。しかし、これらの点は研究中であり、多タンク方式の養液管理方法や殺菌装置も開発されてきている。

1 切花

(1) アマリリス

1. 対象地域 県下一円
2. 土 壤 砂質～粘質土（砂丘未熟土、黄色土、灰色低地土）
3. 栽植本数 10,000 球/10 a
4. 目標収量 100,000 本/10 a
5. 栽培型と主な作業

栽培型	1			2			3			4			5			6			7			8			9			10			11			12			品 種
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下				
促成栽培	[]						● ○ 球根養成						✕ ○						△						高性赤花 剣弁 高性赤芯 丸弁 埼玉早生												
半促成栽培	[]						● ○ 球根養成						✕ ○						△																		
主要作業名 (促成栽培)							● 元肥	● 球根定植					● 追肥						● 追肥								● 追肥							● 球根堀上・促成ほ場施肥	● 定植・加温開始		

6. 施肥基準 (kg/10a)

施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
元肥	3月下旬	30.0	30.0	30.0	2,000	有機配合又は緩効性化成
追肥	5月	10.0	10.0	10.0		有機配合又は化成
	7月	10.0	10.0	10.0		有機配合又は化成
	8月	10.0	10.0	10.0		有機配合又は化成
球根養成計		60.0	60.0	60.0	2,000	
促成ほ場 10月上旬		30.0	30.0	30.0	2,000	有機配合又は化成

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は p. 349～351 参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は p. 353 6. 土壌診断を活用した適正施肥参照。
- (3) アマリリスは多肥を好むので、元肥は十分施用し、追肥も随時行う。
- (4) 植込みに際して、完熟堆肥、油粕、過リン酸石灰を土にすき込んでおく。
- (5) 窒素分が多すぎると灰色カビ病が発生しやすい。

(2) カーネーション (施設 10～5月切り)

1. 対象地域 県下一円
2. 土 壤 壤質～粘質土 (多湿黒ボク土、灰色低地土)
3. 栽植本数 20,000 株/10 a
4. 目標収量 130,000 本/10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	品 種
栽培型	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	
大 輪 施設10～ 5月取り			■			○	☒	☒	☒	△	□		シベリア テッシノ 系
スプレー 施設栽培			■			○	☒	☒	☒	△	□		
主要作業名 (大 輪)	● 追肥	● 追肥	● 換気 (随時) 追肥			土 壤 消 毒	定 植	● 追肥	● 追肥 ネット張り・摘心	● 追肥 摘心・ネット張り	● 追肥・ネット張り 摘蓄(随時)	● 収穫始め ビニル張り 追肥	

6. 施肥基準 (kg/10a)

施 肥 時 期	N	P ₂ O ₅	K ₂ O	施 肥 例
7 月	6.0	4.0	6.0	液肥
8 月	6.0	4.0	6.0	液肥
9 月	6.0	4.0	6.0	配合
10 月	6.0	4.0	6.0	配合
11 月	6.0	4.0	6.0	配合
12 月	6.0	4.0	6.0	配合
1 月	6.0	4.0	6.0	配合
2 月	6.0	4.0	6.0	配合
3 月	6.0	4.0	6.0	配合
計	54.0	36.0	54.0	

7. 施用上の留意事項

定植前に必ず土壌診断を実施する。

(3) ガーベラ

1. 対象地域 県下一円
2. 土 壤 壤質～粘質土 (赤色土、黄色土、灰色低地土)
3. 栽植本数 4,500 株/10 a
4. 目標収量 200,000 本/10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	品 種
栽培型	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	
苗定植 栽培													ミニ系 大輪系
	葉欠き	葉欠き	● 追肥 (2年目)	● 葉欠き 耕うん・深耕	● ● 元植・葉欠き 追肥・葉欠き 土壌消毒・酸度矯正 (2年目)	● 追肥・葉欠き	葉欠き	葉欠き	● 追肥 葉欠き	葉欠き	● 追肥 葉欠き	葉欠き	
主要作業名													

葉欠きは定期的に少しずつ行う。

6. 施肥基準 (kg/10a)

施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
元 肥	5月上旬	20.0	20.0	20.0	8,000	配合、コーティング肥料主体 配合又は液肥 配合又は液肥 配合又は液肥 配合又は液肥 配合又は液肥
追 肥	6月上旬	5.0	5.0	5.0		
	9月中旬	5.0	5.0	5.0		
	11月下旬	5.0	5.0	5.0		
	2月上旬	5.0	5.0	5.0		
	4月中旬	5.0	5.0	5.0		
計		45.0	45.0	45.0	8,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分 (窒素、リン酸、カリ) に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は p. 349～351 参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は p. 353 6. 土壌診断を活用した適正施肥参照。
- (3) 土壌消毒後、pH6.0～6.5 に酸度矯正をする。
- (4) 窒素が多いと葉が旺盛となり、開花数が減少する。

(4) キク I (露地秋寒ギク)

- 1. 対象地域 西部 (三方原台地)
- 2. 土 壤 粘質土 (赤色土、黄色土)
- 3. 栽植本数 6,000~8,000 株/10a
- 4. 目標収量 40,000 本/10 a
- 5. 栽培型と主な作業

栽培型	3			4			5			6			7			8			9			10			11			品 種
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	
露地秋ギク (10月下旬 ~11月上旬 出荷)				☒				☐		◎	☒			☒														秀月 秋風
主要作業名				親株の摘心			挿芽床の準備			● ● 本ぼの耕起・土壌消毒	● ● 整地・元肥・定植		● 追肥・土寄・敷草			● 追肥・土寄・敷草・ネット			● 仕立本数整理									

6. 施肥基準 (kg/10a)

施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
元肥	定植 15 日前				4,000	土壤改良資材
追肥	第一回摘心後	7.0	6.0	6.0		有機配合
	最終摘心時	7.0	6.0	6.0		有機配合
	最終摘心 15 日後	14.0	12.0	12.0		有機配合
計		28.0	24.0	24.0	4,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分 (窒素、リン酸、カリ) に留意し、その分施用量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施用量の削減方法は p. 349~351 参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施用量を減らす施肥設計を立てる。施用量の削減方法は p. 353 6. 土壌診断を活用した適正施肥参照。
- (3) 肥効を持続させるために緩効性肥料を併用する。

(5) キク II (寒コギク)

1. 対象地域 西部
2. 土 壤 壤質～粘質土 (赤色土、黄色土)
3. 栽植本数 8,000～10,000 本/10 a
4. 目標収量 60,000 本/10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬 栽培型	1		2		3		4		5		6		7		8		9		10		11		12		品 種
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	
11月出荷																									寒 椿 さ ゆ り
12月出荷																									
(12月出荷) 主要作業名							● 挿芽		● 元肥		● 定植		● 追肥・一回目摘心		● 追肥・二回目摘心		● 追肥		● ネット張り		● 追肥				出荷

6. 施肥基準 (kg/10a)

施 肥 時 期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施 肥 例
元肥	定植 10 日前				2,000	有機配合 有機配合 有機配合 有機配合 (生育に 応じて与える)
追肥	第一回摘心時	7.0	6.0	6.0		
	第二回摘心時	7.0	6.0	6.0		
	第三回摘心 15 日後	7.0	6.0	6.0		
	9 月上旬～下旬 (花肥)	7.0	6.0	6.0		
計		28.0	24.0	24.0	2,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分 (窒素、リン酸、カリ) に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は p. 349～351 参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は p. 353 6. 土壌診断を活用した適正施肥参照。
- (3) 肥効を持続させるために緩効性肥料を併用する。
- (4) 花芽分化期の施用は開花が不揃いになりやすいので控える。

(6) キク III (電照ギク)

1. 対象地域 西部・中遠・東部
2. 土 壤 壤質土 (黒ボク土、赤色土、黄色土、灰色低地土)
3. 栽植本数 20,000~24,000 株/10a
4. 目標収量 45,000~50,000 本/10 a
5. 栽培型と主な作業

栽培型	5			6			7			8			9			10			11			12			1			2			3			品 種									
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下										
年末出荷																																					神馬 精興の秋 紅鶴						
電照栽培 一 出 荷 二 月																																											
三月出荷																																											
主要作業名 (年末出荷)	親株挿芽			親株植付			親株第一回摘心			親株第二回摘心			挿芽			定植・追肥			● 追肥・電照開始・摘心			● 第一回整枝			● 追肥			消灯			ネット張り			下葉取り			第二回整枝			収穫始め			

6. 施肥基準 (kg/10a) (年末出荷の場合)

施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
元 肥	7月中旬				4,000	有機配合 有機配合 有機配合
追 肥	定植直後	9.0	6.0	6.0		
	摘心後 消灯 20 日前	9.0 4.5	6.0 3.0	6.0 3.0		
計		22.5	15.0	15.0	4,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分 (窒素、リン酸、カリ) に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は p. 349~351 参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は p. 353 6. 土壌診断を活用した適正施肥参照。
- (3) 施肥量は前作の残存量に留意し、窒素濃度が高い場合は元肥を施用しない。
- (4) 水田土壌 (灰色低地土) は 5 割減とする。
- (5) 二度切り栽培は液肥主体とする。

(7) キク IV (夏秋ギク)

1. 対象地域 中遠・西部
2. 土 壤 壤質～粘質土 (赤色土、黄色土、褐色低地土)
3. 栽植本数 18,000 株/10a
4. 目標収量 40,000 本/10 a
5. 栽培型と主な作業

栽培型	1			2			3			4			5			6			7			8			品 種		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下			
7月(盆)出荷																									岩の白扇 秋風 スーパー秋風		
8月(盆)出荷																											
主要作業名 (8月出荷)				●			●						●														
				挿芽			定植準備・施肥			定植			追肥			ピンチ・電照									追肥・消灯		

6. 施肥基準 (kg/10a)

施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
元肥	定植10日前				4,000	有機配合 有機配合 有機配合
追肥	定植直後	9.0	6.0	6.0		
	摘心後 消灯20日前	9.0 4.5	6.0 3.0	6.0 3.0		
計		22.5	15.0	15.0	4,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分 (窒素、リン酸、カリ) に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は p. 349～351 参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は p. 353 6. 土壌診断を活用した適正施肥参照。
- (3) 施肥量は前作の残存量に留意し、窒素濃度が高い場合は元肥を施用しない。

(8) キク V (スプレーギク)

1. 対象地域 西部
2. 土 壤 粘質土 (赤色土、黄色土)
3. 栽植本数 18,000~22,000 株/10 a
4. 目標収量 40,000 本/10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬 栽培型	4			5			6			7			8			9			10			11			12			1			2			3			品 種
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下				
7月出荷	☉			☒			☉			☒			☉			☒			☉			☒			☉			☒			☉			セイブリン セス セイチャイナ			
11月出荷										☉			☒			☉			☒																		
3月出荷																			☉			☒			☉			☒			☉						
主要作業名 (7月中旬出荷)	●			●			●			●																					●			元肥			
	定植・電照開始			追肥			摘心			整枝			電照打ち切り・シエード開始			追肥			追肥			シエード終了・収穫															

6. 施肥基準 (kg/10a)

施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例	
秋冬	元肥	定植数日前	10.0	10.0	10.0	3,000	生育を見ながら液肥で施用する。
	追肥	摘心後	3.0	3.0	3.0		
		蕾確認後 (3~5回)	8.0	8.0	8.0		
計		21.0	21.0	21.0	3,000		
春夏	元肥	定植数日前	8.0	8.0	8.0		生育を見ながら液肥で施用する。
	追肥	蕾確認後 (2~3回)	5.0	5.0	5.0		
		計	13.0	13.0	13.0		

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分(窒素、リン酸、カリ)に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は p. 349~351 参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は p. 353 6. 土壌診断を活用した適正施肥参照。
- (3) 堆肥は、土づくりを目的として、年1回、完熟堆肥を施用する。
- (4) 窒素が多すぎると柳芽の発生など草姿が乱れやすいので注意する。
- (5) 年間作付け回数が多いので、元肥は有機質の肥料を主体とする。

(9) キンギョソウ

1. 対象地域 県下一円
2. 土 壌 砂質～粘質土（砂丘未熟土、多湿黒ボク土）
3. 栽植本数 20,000 株／10a
4. 目標収量 60,000 本／10 a
5. 栽培型と主な作業

栽培型	6		7		8		9		10		11		12		1		2		3		4		品 種	
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上		中
加温促成																							メリーランド ピンク 雪姫 アスリート イエロー	
主要作業名			は 種	仮 植	● 元 肥	● 摘 心	● 定 植	● 追 肥	● 収 穫 始 め	● ビ ニ ル 被 覆 ・ 追 肥													収 穫 終 了	

6. 施肥基準 (kg／10a)

施 肥 時 期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施 肥 例
元 肥	定植 10 日前	11.0	12.0	13.0	2,000	有機配合、緩効性肥料 有機配合 有機配合又は化成
追 肥	10 月上旬	5.0	6.0	6.0		
	11 月上旬	3.0	3.0	3.0		
計		19.0	21.0	22.0	2,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施用量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施用量の削減方法は p. 349～351 参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施用量を減らす施肥設計を立てる。施用量の削減方法は p. 353 6. 土壌診断を活用した適正施肥参照。
- (3) 肥料による濃度障害を受けやすいため、土壌診断を行う。
- (4) 砂質土の場合は、追肥回数を多くする。
- (5) バタフライ系や覆色系は 2 番花の茎が太くなり易いので、追肥は樹勢をみて速効性の肥料を施用する。

(10) シ ャ ク ヤ ク

1. 対象地域 中遠・西部
2. 土 壤 壤質～粘質土（褐色森林土、赤色土、黄色土）
3. 栽植本数 3,000～3,500 株／10a
4. 目標収量 4,000 本（3年目）～10,000 本（5年目）／10 a
5. 栽培型と主な作業

栽培型	1		2		3		4		5		6		7		8		9		10		11		12		品 種
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	
露地栽培																								さつき 伊佐地早生 ラ.テンドレス	
マルチ栽培																									
ハウス栽培																									
主要作業名 (マルチ栽培)	● 追肥 (マルチ萌芽前)		● マルチ除去						● 追肥・切花終了10日後								● 元肥・追肥		● 定植						

6. 施肥基準 (kg/10a)

施 肥 時 期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
1年目	元 肥	3.0	3.0	3.0	3,000	有機配合
3年目	1月上旬 (萌芽前)	8.0	7.0	8.0		有機配合
	5月上中旬 (切花終了10日後)	12.0	12.0	12.0		有機配合
	7月上中旬	5.0	5.0	5.0		有機配合
計		28.0	27.0	28.0	3,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施用量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は p. 349～351 参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施用量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は p. 353 6. 土壌診断を活用した適正施肥参照。
- (3) 肥料は有機質肥料を主に用いる。

(11) シュッココンカスミソウ

1. 対象地域 県下一円
2. 土 壤 砂質～粘質土（砂丘未熟土、灰色低地土）
3. 栽植本数 3,000 株/10 a
4. 目標収量 42,000 本/10 a
5. 栽培型と主な作業

栽培型	3		4		5		6		7		8		9		10		11		12		1		2		品 種
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	
1型																									ニューフェイス 雪ん子
1.5型																									
2型																									
主要作業名 (1型)																									

6. 施肥基準 (kg/10a)

施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
元肥	定植10日前	10.0	12.0	10.0	2,000	有機配合、化成 有機配合、化成 有機配合、化成
追肥	定植15日後	3.0	4.0	3.0		
	台刈り後	5.0	6.0	5.0		
計		18.0	22.0	18.0	2,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は p. 349～351 参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は p. 353 6. 土壌診断を活用した適正施肥参照。
- (3) 酸性土壌では、定植前の準備として石灰質肥料（草木灰、過リン酸石灰、石灰等）を施し、酸度を矯正する。
- (4) リン酸やカリ肥料を主体に施用し、茎を硬く育てる。

(12) スターチス (ハイブリッド系)

1. 対象地域 県下一円
2. 土 壌 壤質～粘質土(多湿黒ボク土、赤色土、黄色土、灰色低地土)
3. 栽植本数 4,000 株/10a
4. 目標収量 50,000～60,000 本/10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬 栽培型	3		4		5		6		7		8		9		10		11		12		1		2		品 種
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	
加 温 培	#																								ブルー ファンタ ジア
	Ω Ω																								
主 要 作 業 名	●																								
	元肥																								
●																									
追肥																									
●																									
ネット張り																									
●																									
追肥																									
●																									
追肥																									
●																									
追肥																									

6. 施肥基準 (kg/10a)

施 肥 時 期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施 肥 例
元 肥	定植 20 日前	10.0	10.0	10.0	3,000	有機配合
追 肥	6 月上旬	2.0	2.0	2.0		有機配合
	8 月上旬	2.0	2.0	2.0		有機配合
	10 月上旬	2.0	2.0	2.0		有機配合
	12 月中旬	2.0	2.0	2.0		有機配合
	2 月中旬	2.0	2.0	2.0		液肥配合
計		20.0	20.0	20.0	3,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は p. 349～351 参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は p. 353 6. 土壌診断を活用した適正施肥参照。
- (3) pHは 6.5 ～7.0 と高めにする。
- (4) ECが高いと生育に支障が生じるので、ECを上昇させやすい化学肥料は控える。

(13) トルコギキョウ (ユーストマ)

1. 対象地域 県下一円
2. 土 壤 砂質～粘質土 (砂丘未熟土、多湿黒ボク土、赤色土、黄色土、灰色低地土)
3. 栽植本数 25,000 株/10 a
4. 目標収量 37,500 本/10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
栽培型	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下
超促成 植え替え 11～12月 4～5月 出荷					■	●	(育苗ほ)◇	◆		□	◎	
促成 2度切 1～2月 5～6月 出荷		■	■				(育苗ほ)◇	◆		□	◎	
促成 2～4月 出荷			■				(育苗ほ)◇	◆		□		
半促成加温 3～5月 出荷			■						(育苗ほ)◇		◎	□
半促成加温 4～5月 出荷			■						(育苗ほ)◇		◎	□
半促成無加温 5～6月 出荷	◎									(育苗ほ)◇		

6. 施肥基準 (kg/10a)

施肥時期	N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
元肥 定植前1～2ヶ月	9.0	8.0	8.0	3,000	有機配合
追肥 定植後1～2ヶ月	3.0	2.0	3.0		有機配合、または液肥をかん水と同時に施用
計	12.0	10.0	11.0	3,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分 (窒素、リン酸、カリ) に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は p. 349～351 参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は p. 353 6. 土壌診断を活用した適正施肥参照。
- (3) pHは6.5 程度に苦土石灰等を用いて矯正する。
- (4) 固定品種は、F₁品種(上記施用量)の3～5割増とする。

(14) バ ラ

1. 対象地域 県下一円
2. 土 壌 壤質～粘質土 (黒ボク土、灰色低地土)
3. 栽植本数 4,800～5,500 株/10a
4. 目標収量 120,000 本/10a
5. 栽培型と主な作業

栽培型	月旬												品 種	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下		
第1年次													ローテローゼ ノプレス バレオ	
主要作業名				● 元肥 切接苗定植(露地)	● 仮支柱立、敷わら(マルチ) 摘蓄(随時)	● 追肥・摘心	● 摘心(随時)・追肥	● 本支柱立・誘引	● 追肥	● 最終摘心	● ビニル張り	● 収穫始め(以後だら切り)		● 追肥
第2年次以降														
主要作業名	● 追肥		● 追肥	● 加温停止・二重被覆除去		● 夏季せん定	● 追肥	● 摘心	● 追肥	● 最終摘心		● 収穫始め(以後だら切り)		● 追肥

6. 施肥基準 (kg/10a)

施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	施肥例	
第1年次	元肥	4月中旬	15.0	10.0	10.0	有機配合、ユティグ肥料
	追肥	6月上旬	6.0	6.0	6.0	化成又は有機配合
		7月中旬	6.0	6.0	6.0	化成又は有機配合
		8月中旬	10.0	10.0	10.0	化成又は有機配合
		10月下旬	10.0	10.0	10.0	化成又は有機配合
	計		47.0	42.0	42.0	
第2年次	追肥	1月上旬	10.0	10.0	10.0	有機配合
		3月中旬	6.0	6.0	6.0	有機配合
		7月上旬	10.0	10.0	10.0	有機配合
		8月中旬	10.0	10.0	10.0	有機配合
		10月下旬	10.0	10.0	10.0	有機配合
	計		46.0	46.0	46.0	

7. 施用上の留意事項

- (1) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は p. 353 6. 土壌診断を活用した適正施肥参照。
- (2) 改植時に 60～80 cm を深耕し、堆肥 20t/10a (耐久性のピートモスやバーク堆肥のようなものを主体に、牛ふん堆肥のような易分解性の有機物を 2～3 割入れる) を施用する (5～8 年ごと)。

(15) フリージア

1. 対象地域 西部
2. 土 壤 砂質～粘質土（赤色土、黄色土、灰色低地土）
3. 栽植本数 60,000 株/10 a
4. 目標収量 60,000 本/10 a
5. 栽培型と主な作業

栽培型		8			9			10			11			12			1			2			3			4			品 種					
		上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下						
半促成栽培		2月出荷		◆ ○ ◻ Ω □																														ラインベルト アラジン エレガンス
				3月出荷		◆ ○ ◻ Ω □																												
		● 元肥・（定植の2週間前） 本ほ耕起・土壌消毒																																
主要作業名		定植 日除け																																
		増土（肥土15cm入れる） 促成加温開始 促成入室又はビニル被覆 半促成加温開始 かん水・保温管理（夜温10度目標）																																

6. 施肥基準 (kg/10a)

施 肥 時 期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施 肥 例
元 肥	定植2週間前	14.0	11.0	12.0	2,000	有機配合、化成 液肥又は化成
追 肥	11月下旬以降	14.0	11.0	12.0		
計		28.0	22.0	24.0	2,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は p. 349～351 参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は p. 353 6. 土壌診断を活用した適正施肥参照。
- (3) 追肥は 11 月下旬以後生育状況を見ながら、数回に分けて液肥又は化成で行う。

(16) ホ オ ズ キ

1. 対象地域 西部
2. 土 壤 粘質土 (赤色土、黄色土、灰色低地土)
3. 栽植本数 10,000 株 (地下茎) / 10 a
4. 目標収量 12,000 本 / 10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬 栽培型	12			1			2			3			4			5			6			7			8			品 種
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	
7月出荷	○			○			✕			✕			#			⇓			□						在来			
8月出荷				○			○									#			⇓			□						
主要作業名 (7月出荷)				● 元 定 肥 植			マル チ			● 追 肥			● 追 肥 マル チ 除 去			ネ ット												

6. 施肥基準 (kg/10a)

施 肥 時 期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施 肥 例
元 肥	12月	12.0	14.0	9.0	4,000	緩効性
追 肥	3月	6.0	6.0	6.0		配合
	4~5月	4.0	4.0	4.0		化成
計		22.0	24.0	19.0	4,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分 (窒素、リン酸、カリ) に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は p. 349~351 参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は p. 353 6. 土壌診断を活用した適正施肥参照。
- (3) 2回目の追肥は5月下旬までに、草勢に応じて施用する。時期が遅くなつてからの追肥は花落ちや、実の着色不良を招くので注意する。

(17) マーガレット

1. 対象地域 伊豆
2. 土 壤 粘質～壤質土（黒ボク土）
3. 栽植本数 4,000～5,000 株/10 a
4. 目標収量 70,000 本/10 a
5. 栽培型と主な作業

栽培型	4		5		6		7		8		9		10		11		12		1		2		3		4		品 種		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中		下	
ビニル栽培	<div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> □ ○ ⊗ △ ▽ ■ </div>																												サザン エレガ ンスホ ワイト
(ビニル栽培) 主要作業名		土壌消毒 (定植1ヶ月前)	挿芽	● 定植・元肥	摘心		● 追肥	ビニル被覆		収穫始め																	収穫終り	フェアリー ライト ピンク 在来系	

6. 施肥基準 (kg/10a)

施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
元肥	6月下旬	3.0	3.0	3.0	1,000	バーク堆肥、有機配 合又は化成 化成
追肥	9月上旬	6.0	6.0	6.0		
計		9.0	9.0	9.0	1,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は p. 349～351 参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は p. 353 6. 土壌診断を活用した適正施肥参照。
- (3) 連作の場合、9月の追肥を5割増とする。

(18) ユリ (オリエンタルハイブリッド)

1. 対象地域 県下一円
2. 土 壌 砂質～粘質土 (砂丘未熟土、黄色土)
3. 栽植本数 カサブランカ 15,000～18,000 本、スターギャザー 30,000 本/10a
4. 目標収量 15,000～30,000 本/10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬 栽培型	1			2			3			4			5			6			7			8			9			10			11			12			品 種
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下				
促成栽培																																					ル・レーブ カサブランカ スターガイ ザー
抑制栽培																																					
主要作業名 (促成栽培)																																					

6. 施肥基準 (kg/10a)

施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
元肥	植えつけ時	17.0	25.0	11.0	2,000	緩効性
追肥	11月	5.0	5.0	5.0		配合
	1月	5.0	5.0	5.0		配合
	3月	5.0	5.0	5.0		配合
計		32.0	40.0	26.0	2,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分 (窒素、リン酸、カリ) に留意し、その分施用量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施用量の削減方法は p. 349～351 参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施用量を減らす施肥設計を立てる。施用量の削減方法は p. 353 6. 土壌診断を活用した適正施肥参照。
- (3) 元肥は耕うん 7 日前に土壌とよく混和しておく。
- (4) 保肥力のある土壌では、上記施用量より 2～3 割削減する。
- (5) 窒素分が多すぎると灰色かび病が発生しやすい。

2 枝もの

(1) アカシア I (三角葉)

1. 対象地域 西部
2. 土 壤 壤質～粘質土 (褐色森林土)
3. 栽植本数 540～900 株/10 a
4. 目標収量 100 ケース (60～100 本/ケース) /10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	品 種
栽培型	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	
採種	(袋かけ)		(開花)		(採種)								三角葉アカシア優良系
実生育苗	春まき	○(発芽) — △ — ◎					○ — △ — ◎		◎(発芽) — △				
	夏まき				○ — ◎		○ — △ — ◎		◎(発芽) — △				
	秋まき	◎					◎		◎(発芽) — △				
取木繁殖(高取木)			○ — ◎		○ — ◎		○ — ◎		◎(発芽) — △				
幼木園	⊙		◎		⊗						⊙		
主要作業名	切枝	防寒除去	●元肥 ●定植	摘心		●追肥	支柱立て	除草		収穫始め	●追肥	防寒	
成木園	⊙		◎		⊗						⊙		
主要作業名	切枝出荷		●追肥 ●整枝	除草		●敷草 ●追肥		防風対策	切枝出荷				

6. 施肥基準 (kg/10a)

施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	施肥例	
幼木	元肥	3月上中旬	5.0	5.0	5.0	配合又は鶏ふん
	追肥	6月下旬	4.0	4.0	2.0	配合又は鶏ふん
		11月上旬	4.0	4.0	2.0	配合又は鶏ふん
	計		13.0	13.0	9.0	
成木	追肥	3月中旬	7.0	7.0	5.0	配合又は鶏ふん
		6月下旬	7.0	8.0	6.0	配合又は鶏ふん
	計		14.0	15.0	11.0	

(2) アカシア II (銀葉)

1. 対象地域 西部
2. 土 壌 壤質～粘質土 (褐色森林土)
3. 栽植本数 100～120 株／10a
4. 目標収量 100 ケース (100 本／ケース) /10 a
5. 栽培型と主な作業

栽培型		月旬												品 種																					
		1			2			3			4				5			6			7			8			9			10			11		
実生栽培	採種	(袋かけ) (開花) (採種)												銀葉アカシア 優良系																					
	露地栽培																																		
	室内育苗 春まき 秋まき																																		
取木繁殖 (高取木)																																			
幼木園														同																					
主要作業名		●元肥 定植 摘心 ●追肥 支柱立て 牧草は種 野うさぎ防除 ●追肥 防寒																																	
成木園																																			
主要作業名		土むろを使用 促成もの出荷 自然開花もの出荷 整枝 ●追肥 台風対策 (防風垣・ネット) 葉もの出荷																																	

6. 施肥基準 (kg/10a)

施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	施肥例	
幼木園	元肥	3月中旬	3.0	3.0	1.0	配合又は鶏ふん
	追肥	6月下旬	2.0	2.0	2.0	
		11月上旬	2.0	2.0	2.0	
計		7.0	7.0	5.0		
成木園	追肥	4月上旬	8.0	7.0	8.0	配合又は鶏ふん
	計		8.0	7.0	8.0	

7. 施用上の留意事項

成木園は一般に少肥で良く、収穫期に肥料切れさせ、芽止まりを促進する。

(3) エニシダ

1. 対象地域 西部
2. 土 壤 粘質土 (赤色土、黄色土)
3. 栽植本数 2,400~2,800 株/10 a
4. 目標収量 100 ケース (200 本/ケース) /10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬 栽培型	1			2			3			4			5			6			7			8			9			10			11			12			品 種
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下				
育苗	□																																				石化エニシダ
1年	○																																				
2年	☼*																																				
3年	☼*																																				
主要作業名				● 花収穫始め	● 定植・追肥	● 挿木				● 追肥	● 中耕除草							● 追肥	● 石化収穫始め							● 追肥											

6. 施肥基準 (kg/10a)

施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	草木灰	施肥例
追 肥	3月上旬	5.0	5.0	5.0		化成
	5月上旬	5.0	7.0	5.0		化成、鶏ふん
	8月上旬	13.0	1.0	3.0		尿素、鶏ふん
	10月下旬	13.0	—	—	500	尿素、草木灰
計		36.0	13.0	13.0	500	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料切れは石化率が低下するので注意する。
- (2) 尿素は全面バラマキをする (窒素の肥効が高いと石化がよい)。

(4) ク ジャ ク ヒ バ

1. 対象地域 西部
2. 土 壤 壤質～粘質土（褐色森林土）
3. 栽植本数 900～1,200 株／10a
4. 目標収量 100 ケース（50 本／ケース）／10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬 栽培型	1		2		3		4		5		6		7		8		9		10		11		12		品 種
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	
挿木育苗	(発芽)																								黄金クジャク ヒバ
	□																								
	△																								
成木園	◎																								
	○																								
主要作業名	●																								
	●																								
収穫	●																								追肥
	●																								移植・定植
	●																								中耕除草
	●																								敷草
	●																								追肥
	●																								収穫

6. 施肥基準 (kg/10a)

施 肥 時 期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施 肥 例
追 肥	1月上旬	—	—	—	2,000	有機配合 有機配合
	3月中旬	6.0	5.0	6.0		
	7月中旬	4.0	4.0	4.0		
計		10.0	9.0	10.0	2,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は p. 349～351 参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は p. 353 6. 土壌診断を活用した適正施肥参照。
- (3) 成木園は9月以降、肥料切れさせる。

(5) コ デ マ リ

1. 対象地域 湖西
2. 土 壤 壤質～粘質土 (黄色土、灰色低地土)
3. 栽植本数 1,800～2,000 株/10 a
4. 目標収量 150 ケース (120 本/ケース) /10 a
5. 栽培型と主な作業

栽培型	1		2		3		4		5		6		7		8		9		10		11		12		品 種
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	
ビニル加温 促成栽培																									早生コデマリ
ビニル無加 温半促成栽培																									
露地栽培																									
主要作業名	ハウスの手入れ		防風垣の整備		ビニル被覆		かん水及びシリンジ		収穫始め		せん定		● 定植・追肥		● 追肥		茎数整理		敷草						

6. 施肥基準 (kg/10a)

施 肥 時 期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
寒 肥	12月下旬～1月中旬	7.0	8.0	8.0	2,000	配合
春 肥	4月上中旬	15.0	10.0	10.0		配合
夏 肥	6月上中旬	3.0	3.0	3.0		配合
計		25.0	21.0	21.0	2,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分 (窒素、リン酸、カリ) に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は p. 349～351 参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は p. 353 6. 土壌診断を活用した適正施肥参照。

(6) シキミ I (切枝)

1. 対象地域 山間地
2. 土 壌 壤質～粘質土 (黒ボク土、褐色森林土)
3. 栽植本数 1,500～2,000 株/10 a
4. 目標収量 20,000 本/10 a
5. 栽培型と主な作業

栽培型	月旬												品 種			
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12				
実 生	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	選抜系
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	
さし木	○															
	○															
切枝栽培	○															
	○															
主要作業名 (切枝栽培)	● 追肥 耕うん整地		定植	敷草							● 追肥 採種					

6. 施肥基準 (kg/10a)

施 肥 時 期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施 肥 例
元 肥	2 月				3,000	配合 配合
追 肥	2月～3月	10.0	10.0	10.0		
	10月～11月	10.0	10.0	10.0		
計		20.0	20.0	20.0	3,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分 (窒素、リン酸、カリ) に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は p. 349～351 参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は p. 353 6. 土壌診断を活用した適正施肥参照。

(7) シキミ II (苗木生産)

1. 対象地域 富士市
2. 土 壤 壤質土 (黒ボク土)
3. 栽植本数 16,000 株/10a
4. 目標収量 15,000 本/10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬 栽培型	1			2			3			4			5			6			7			8			9			10			11			12			品 種
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	
1年目													▽												○			選抜系									
2年目	Ⓜ												(発芽)												☒				Ⓜ								
3年目	Ⓜ												△												☒												
4年目													○												☒												
5年目																																					
主要作業名				防寒除去			● 元肥 移植・定植 しきわら			● 追肥			● 追肥 間引き			● 追肥 摘心			● 追肥			● 追肥 採種			● 追肥 摘心			● は種・防寒 収穫始め									

6. 施肥基準 (kg/10a)

施 肥 時 期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施 肥 例	
第一 年次	元 肥	4月	9.0	3.0	—	3,000	緩効性 有機配合又は化成 有機配合又は化成 有機配合又は化成 有機配合又は化成 有機配合又は化成 有機配合又は化成
	追 肥	5月上旬	8.0	10.0	6.0		
		6月上旬	8.0	8.0	8.0		
		7月上旬	8.0	8.0	8.0		
		8月上旬	8.0	10.0	6.0		
		9月下旬	6.0	6.0	6.0		
		10月中旬	6.0	8.0	4.0		
計		53.0	53.0	38.0	3,000		
第二 年次 以降	追 肥	5月上旬	8.0	10.0	6.0		有機配合又は化成 有機配合又は化成 有機配合又は化成 有機配合又は化成 有機配合又は化成 有機配合又は化成
		6月上旬	8.0	8.0	8.0		
		7月上旬	8.0	8.0	8.0		
		8月上旬	8.0	10.0	6.0		
		9月下旬	6.0	6.0	6.0		
		10月中旬	6.0	8.0	4.0		
	計		44.0	50.0	38.0		

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分(窒素、リン酸、カリ)に留意し、その分施用量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は p. 349~351 参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は p. 353 6. 土壌診断を活用した適正施肥参照。

(8) センリョウ

1. 対象地域 湖西・中部
2. 土 壤 壤質～粘質土 (黄色土、灰色低地土)
3. 栽植本数 4,300 株/10a
4. 目標収量 100 ケース (100 本/ケース) /10a
5. 栽培型と主な作業

月旬 栽培型	1		2		3		4		5		6		7		8		9		10		11		12		品 種
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	
露地 被覆栽培	◎-----X-----																							紅色種 黄色種	
	X-----X-----																								
主要作業名	● 追肥		● 中耕・春肥		枝の誘引 (3年目以降)										側枝除去		倒伏株誘引		● 追肥		寒冷紗の補修		収穫始め		
	ほ場整理																								

6. 施肥基準 (kg/10a)

施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
元肥	定植1ヶ月前				2,000	種粕、化成 種粕、化成
追肥	1月下旬				2,000	
	3月上旬	5.0	4.0	4.0		
	9月下旬	2.0	1.0	1.0		
計		7.0	5.0	5.0	2,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分 (窒素、リン酸、カリ) に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は p. 349～351 参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は p. 353 6. 土壌診断を活用した適正施肥参照。
- (3) 定植1年目は、6月に配合肥料を窒素成分で4kg施用する。
- (4) 追肥は、生育旺盛となる前の春肥を主体とする。
- (5) 1月の施肥は、無駄枝を地際から切り取った後、株の状態に応じて施用する。

(9) ツツジ I (苗木養成)

1. 対象地域 伊東・裾野
2. 土 壤 壤質土 (黒ボク土)
3. 栽植本数 (最終年次)クルメツツジ系 5,000 株、ヒラドツツジ系 4,000 株/10 a
4. 目標収量 クルメツツジ系 5,000 本、ヒラドツツジ系 4,000 本/10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬 栽培型	1			2			3			4			5			6			7			8			9			10			11			品 種
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	
1 年 目																																		大柴
2 年 目																																		
3 年 目																																		
4 年 目																																		
主要作業名				● 元肥 (2年目)	● 移植 (2年目)	● 定植 (3年目)	● 整枝				● 追肥 (2、3年目)	● 寒冷紗 (1年目)	● 挿木 (1年目)	● 寒冷紗 始め							● 追肥 (2・3年目)	● 出荷 (3年目)												

6. 施肥基準 (kg/10a) [ヒラドツツジ系]

施 肥 時 期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	施 肥 例
2 年 目	3 月下旬	6.0	4.0	5.0	有機配合
	5 月下旬	7.0	4.0	6.0	有機配合
	9 月下旬	3.0	4.0	3.0	有機配合
計		16.0	12.0	14.0	
3 年 目	3 月下旬	8.0	5.0	7.0	有機配合
	5 月下旬	9.0	6.0	8.0	有機配合
	9 月下旬	4.0	6.0	4.0	有機配合
計		21.0	17.0	19.0	

7. 施用上の留意事項

- (1) クルメツツジ系はヒラドツツジ系より 2~3 割少なく施用する。
- (2) pHが上昇すると鉄欠乏が発生することがある。
- (3) 定植前に堆肥を 3 t 以上施用する。

(10) ツ ツ ジ II (切枝)

1. 対象地域 西部
2. 土 壤 壤質～粘質土 (褐色森林土)
3. 栽植本数 2,400 株/10 a
4. 目標収量 70 ケース (成樹)、250 ケース (促成仕上株) (50 本/ケース)/10 a
5. 栽培型と主な作業

栽培型	1		2		3		4		5		6		7		8		9		10		11		12		品 種
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	
挿芽育苗																									ベニキリシマ ツツジ
(幼)成木圃																									
主要作業名				定植 (2年目)	開花出荷	● 追肥		● 挿木	● 追肥	敷草			● 追肥	紅葉もの出荷							● 敷草	● 追肥			

6. 施肥基準 (kg/10a)

施 肥 時 期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施 肥 例
追 肥	4月下旬	6.0	6.0	4.0	1,000	化成、鶏ふん
	7月上旬	6.0	6.0	4.0		化成、鶏ふん
	9月下旬	2.0	2.0	2.0		化成
	12月上旬	5.0	5.0	3.0	1,000	化成、鶏ふん
計		19.0	19.0	13.0	2,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分 (窒素、リン酸、カリ) に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は p. 349～351 参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は p. 353 6. 土壌診断を活用した適正施肥参照。

(11) ハ ナ モ モ

1. 対象地域 西部
2. 土 壤 壤質～粘質土（褐色森林土）
3. 栽植本数 80～100 株／10a
4. 目標収量 100 ケース（200 本／ケース）／10 a
5. 栽培型と主な作業

栽培型	1			2			3			4			5			6			7			8			9			品 種
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	
接木育苗																												矢口
成木圃																												
主要作業名	束上げ・水上げ			入室促成			出荷開始			● 追肥			○ 摘心			● 追肥			台風対策 (支柱・防風ネット)									

6. 施肥基準 (kg/10a)

施 肥 時 期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
追 肥	3月下旬～4月上旬	8.0	8.0	6.0	2,000	化成
	5月下旬～6月上旬	2.0				硫安
計		10.0	8.0	6.0	2,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は p. 349～351 参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は p. 353 6. 土壌診断を活用した適正施肥参照。
- (3) 芽だし肥だけに止め、節間を短くするように努める。窒素過多や8月以降まで肥効が持続しないように施用する。
- (4) 1～3年生株の施肥量は施肥基準よりやや少なめとする。

(12) ユーカリ

1. 対象地域 県下一円
2. 土 壤 壤質～粘質土（褐色森林土）
3. 栽植本数 900株（グニー）、500株（小丸葉）／10a
4. 目標収量 100ケース（100本／ケース）／10a
5. 栽培型と主な作業

栽培型	月旬												品 種	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	
実生育苗	2月まき		○△	—	◎									銀丸葉 小丸葉 グニー
	3月まき			○△	—	◎								
	9月まき								○△	—	◎			
	10月まき										○△	—	◎	
成木園														
主要作業名	収穫	は種 鉢上げ	● 追肥 整枝・せん定	● 中耕・除草	定植	ピンチ・ （太い枝）	● 追肥 防風垣・ネット 台風対策（支柱）	収穫	は種 鉢上げ				● 追肥	

6. 施肥基準 (kg/10a)

施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	施肥例
追 肥	3月下旬	5.0	5.0	3.0	化成
	7月中下旬	13.0	11.0	11.0	化成
	12月中旬	4.0	4.0	2.0	鶏ふんまたは化成
計		22.0	20.0	16.0	

7. 施用上の留意事項

小丸葉ユーカリの施肥量は施肥基準よりやや少な目とする。

3 鉢もの

(1) シンビジウム

1. 対象地域 県下一円
2. 目標収量 4,000 鉢/10 a
3. 栽培型と主な作業

月旬 栽培型	1			2			3			4			5			6			7			8			9			10			11			12			品 種
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下				
山 上 げ 栽 培 1年目				△									◆																					マリリン モンロー ロマンス あんみつ姫			
				■									◆																								
				△																																	
2年目				■																																	
3年目				■						▲			△			◆																					
主 要 作 業 名	● 追肥			● 追肥			● 追肥 メリクロン苗導入 暖房終了			● 追肥						遮光・山上げ																					
																						鉢上げ・山下げ						暖房開始									

4. 施肥基準 (kg/4,000 鉢当たり)

施肥時期	N	P ₂ O ₅	K ₂ O	施 肥 例
1 年 目	16.0	24.0	4.0	液肥、化成
2～3年目	32.0	48.0	4.0	種粕、骨粉

5. 施用上の留意事項

2号鉢までは液肥や化成を主体に、4号鉢では種粕と骨粉を混合したものを月1回置き肥する。

(2) パンジー (苗生産)

1. 対象地域 暖地
2. 土 壤 壤土と腐葉土の等量混合または園芸用土
3. 栽植本数 35,000 本/10 a
4. 目標収量 30,000 鉢/10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	品 種
栽培型	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	
													リーガル系 マキム系
主要作業名					発芽温度 (20℃)			鉢上げ (3号)	● 追肥				

6. 施肥基準 (kg/30,000 鉢)

施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	施肥例
元肥	6月	5.0	8.0	3.0	
追肥	10月	25.0	40.0	30.0	
計		30.0	48.0	33.0	

7. 施用上の留意事項

- (1) 壤土と腐葉土の等量混合土は土壤消毒をし、元肥を施用しておく。
- (2) 園芸用土を播種用土に使う場合は、元肥は施用しない。

4 その他

(1) シ バ

1. 対象地域 富士山麓
2. 土 壤 壤質土 (黒ボク土)
3. 栽植本数
4. 目標収量 1,000 束/10a
5. 栽培型と主な作業

月旬 栽培型	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	品 種	
	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下		
新植栽培	◎		◎										ノシバ フジコンパ クト	
春切栽培														
秋切栽培														
主要作業名 (春切栽培)	● 定植	● 追肥・切り取り (収穫)	● 追肥	● 除草剤散布	● 追肥 (2回) ・葉刈り	● 除草剤散布	● 追肥 (2回) ・葉刈り	● 葉刈り	● 追肥 (3回) ・葉刈り	● 除草剤散布	● 追肥 (2回) ・葉刈り	● 葉刈り	● 追肥 (2回・止め肥) ・葉刈り	● 除草

(注) 葉刈りは草丈 7.0mm~2.5mm 程度に刈り込む。

6. 施肥基準

施 肥 時 期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	施 肥 例
追 肥	3月下旬	3.0	4.0	3.0	化成
	4月下旬	3.0	4.0	3.0	化成
	5月 (2回)	5.0	6.0	5.0	有機配合又は化成
	6月 (2回)	5.0	6.0	5.0	有機配合又は化成
	7月 (3回)	7.0	7.0	6.0	有機配合又は化成
	8月 (2回)	5.0	6.0	5.0	有機配合又は化成
	9月 (2回)	5.0	6.0	5.0	化成
計		33.0	39.0	32.0	

7. 施用上の留意事項

- (1) やせ地では施肥基準より年間で窒素分量を 10kg 多くする。
- (2) 収穫後はケイ酸カリ 60kg、重焼リン 60kg、苦土石灰 100kg、鶏ふん 300kg を施用し、土壌改良をする。
- (3) 肥料は葉刈り後に施用する。